

Title	<批評・紹介> 石田幹之助著「支那文化と西方文化との交流」
Author(s)	増村, 宏
Citation	東洋史研究 (1937), 2(3): 277-279
Issue Date	1937-02-23
URL	http://dx.doi.org/10.14989/138724
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

支那文化と西方文化との交流

石田 幹之 助著

著者石田氏は曩に東洋文庫主任として、歐米の東洋學の動向進展に絶えず留意されると共に、支那に於ける所謂西方文化の研究に於ても夙に令名がある。支那文化と西方文化の交流を説く者として、著者の如きは蓋し最適任者であらう。

謂ふ所の西方文化とは何か。支那文化と西方文化との交流とは如何。著者は次の如く述べる。西方文化とは支那より西方に榮えた幾つかの文化群を指し、交流とはそれ等の或る物が支那に傳來し多少とも支那文化に影響したること、並に支那文化がこれ等西方文化群に流入して幾分でもその面上に擦痕を遺したことを意味すると。人間生活の發展向上の所産、人類社會の生活現象生活表現の總和なる文化の東西交流を述べるに當つて取上げられたる時代は太古より十八世紀末に及び、事項は思想、信

仰、學問、美術、文藝の各般に互る廣範圍である。但し印度文化は圈外に措き、佛教も埒外に置く。

その記述は、太古、春秋戰國、漢魏六朝、隋唐、宋元明末の各時代に於ける西方文化の流入及び其影響を説き、且夫々の時代の支那文物の西漸を述べ、清の初期、中期十八世紀の異常なる東西交渉に伴ふ文化交流の時期に於ては、筆を轉じて歐人の支那研究と、支那文物の歐洲流入に伴ふ思想上の影響に及んでゐる。

先づ彩色土器を舉げて太古の東西交渉の意外に廣い事を述べ、降つて紀元前五、六世紀のアケメニード王朝の下に於ける近隣の文化を混するイラン文化の流出、秦の如き國の勢力の西方伸展と共に東トルキスタンに住むインドゲルマン系諸部族を介してのペルシャとの交渉は、純イラン的のものゝみに止らずアツシリヤ、バビロニアの智識を特に天文學、星學上に移入したことを推測し、マケドニア帝國の出現以後の西方文物の流入は以前に比して高度の天文學、曆學、數學の上に跡を徴し得るのみでなく、春秋戰國時代の思想界の遂げた文化的飛躍の裏に外來文化の感化を無視し得ずとし、又別に匈奴其他のアルタイ系諸民族によりイラン文化と共にスキタイ文化

も傳へられたが、これが與へた器物への影響、藝術上の刺戟の點に就き示唆に富む概略の筆を振ふ。

漢に到つては、イランの要素漸く濃く、遠くヘレニズム文化も流入し來り、此狀態六朝に續き、遂にイラン文化全盛時代を現出した隋唐を宗教、繪畫、彫刻、建築、工藝、音樂、舞踊、遊戲、衣食住の各項に就いて述べ、その仲介に重要な役割を演じた陸路のソグド商胡、海路のペルシャ、アラビヤの商人に説き及ぶ。

宋は前代の反動時代、國民文化醸成時代で、南方にアラビヤ人の渡來あるも、漢魏六朝に比しても西方文化の流入は少なかつたと著者は觀てゐる。

元は回教の本地を領有したゝめ、從來の西域文化はペルシャ系文化を主としたものであつたが、更に之に回教文化を新に加へたのを特徴とすべく、西方文化が民間に行き亘れること唐代を過ぐるものありとし、此王朝にして短命に終らなかつたならば、耶蘇教の東漸に伴つて傳來した西亞、歐洲の文明、特に學術の盛行も、次の明朝を待たなかつたであらうとしてゐる。

明末の宣教師の渡來は、中世の精神文化、新時代の物質文化を齎らしたること從來に見ざる所で、甚だしい影

響を支那の思想學術の上に與へたが、典禮問題を契機としての支那研究が歐洲の思想上にも影響した。從來の支那文物の西方傳播は、古代よりの絹、及び漢、隋唐の西域經營に伴ふ文物の西方への浸潤、元の西方支配の下に於ける文化の仲介により、著しきは唐代の製紙法、陶器、其他の工藝、宋元代の羅針盤、火藥、印刷術の如き技藝を遠く西方に傳へたが、十八世紀に到り西歐に美術、工藝、風俗上に支那趣味を横溢させた他に、十六世紀末より爲された支那古典の西譯が、啓蒙思潮の結成に有力な役割を勤め、獨のライプニツク、佛のヴォルテールをして支那思想に傾倒せしめ、アンシクロペディストに支那讚美的態度を取らしめ、經濟學說に於て重農學派の出現を見るに到つた思想上の感化を述べてゐる。

以上著者の記述された所を通讀して、取扱はれた各時代に互る諸般の事項は、各々一つが重要な研究題目であり、現に本講座にも梅原助教の支那文化の源泉、羽田教授の中央亞細亞の文化、後藤博士の西洋人の觀たる支那、著者自身の支那に於ける耶蘇教あり、更に幾多の考究さるべき事象のあることを知るが、この著を通じて著者の意を用ひられた所はイラン文化、特に隋唐時代の傳

播の究明と歐人の支那研究の書誌學的方面の記述であつたと思はれる。この二點は著者の専門とされる所より見て首肯されることであつて、殊に後者に關しては周知の如く「歐人の支那研究」なる好著も出版されてゐる。

翻つて考ふべきは著者の究明に努められたイラン文化が支那に如何程浸透したかの問題であるが、ベリオ氏の朱子の二元哲學の根本に宋代摩尼教徒の信條が横はつて居なかつたかとは一個の提説であるにしても、異文化の流入が何等かの影響なくして行はれる事は考へ得ない。和田教授は^{本講座}支那唐代の外來宗教を、新奇なる智識として實際以上に珍重される嫌はあるがと述べられてゐるが、兎に角文化の一特色とするには異存が無いのであるし、著者も支那の文明史を説くのではないと斷つてゐるのである。近世以降の西洋學術の影響の甚しきは誰人も否定出来ない。著者の筆を擱かれた後の近代列強と支那との交渉は別に説く適當な人もあるであらう。

その一端を曲りなりにも垣間見る仲介をしたとは謙遜の辭であつて、參考論著を附加されたこの百五十頁餘の冊子に依つて、太古以來十八世紀末に至る支那文化と西方文化との交流の事蹟を概見し得ることを著者に感謝せねばならない。

(増 村 宏)